PRツール・記念グッズ・記念プロジェクト

様々なPRツール・記念グッズの作成や記念プロジェクトを行い、区制50周年を盛り上げました。

ピンバッジ

ステッカー

タオル

クリアファイル

バルーン

懸垂幕

ボールペン

うちわ

Tシャツ
（製作：港南区連合町内会長連絡協議会）

50周年記念動画
（協賛：リストインターナショナルリアルティ株式会社）

50周年記念サイドパネル付収集車

ポスター
（中央のポスターは日野中央高等特別支援学校の生徒さんの作品です）

50周年記念誌

記念式典記念品

50周年記念オリジナルフレーム切手

区内中学生によるPRポスター

秋のひまわりプロジェクト

未来の自分にメッセージ

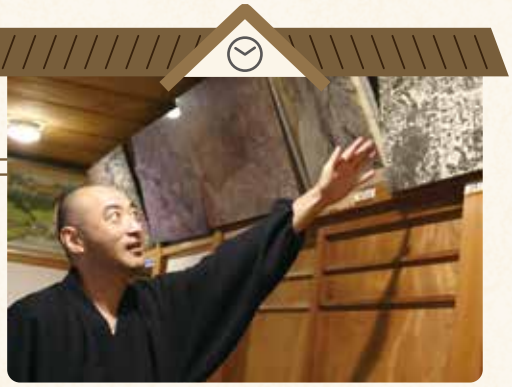
駅とまちの物語

広報よこはま港南区版「地域通信」では、
港南区の誕生とともに発展した「駅」にスポットを当て、シリーズで紹介しました。

※広報よこはま港南区版平成31年1月号～令和元年5月号を再編集

上永谷駅

語ってくれたのは、
駅からほど近い貞昌院の住職、亀野哲也さんです。



航空写真を指し示す亀野哲也さん ▶
（貞昌院にて）

上永谷は上大岡駅と戸塚駅の間に位置する横浜市営地下鉄の駅で、乗降人数1日約37,000人の地上駅です。駅前には幹線道路である環状2号線があり、北側の上永谷エリアと南側の丸山台・日限山・野庭エリアが広がっています。

この地域は鎌倉時代から続く重要な交通路「かまくらみち」が付近を通っていたため、古くからの集落があり、造成前の丸山地区（上永谷駅周辺）にもかやぶきの家屋が並び、田んぼや小麦畑、牛小屋、豚小屋などが昭和40年代後半まで残されていました。

丸山台の開発が始まったのは昭和40年代。山が削られ、大規模な宅地造成が進行していた時代でした。地下鉄車両基地の工事現場も子ども心に近未来都市を冒険するようなワクワク感がありました。空き地もたくさんあったので、子どもの頃はとにかく学年に関係なく大人数で遊んでいました。

横浜近郊のベッドタウン開発が進んでいく中で、京急ニュータウンや港南台、野庭団地などを契機とした大規模な街づくりが進められ、昭和48年には丸山地区の造成工事が始まりました。昭和51年9月に上永谷駅が開業しますが、駅南側の丸山台は造成中で、ブルドーザーや大型ダンプがまだ走り回っていました。造成により丸山や天神山も削られ平らにならされ、古い集落は新しい住宅街へと変貌していったのです。

昭和51年9月4日開業時の
記念式典の様子（交通局提供）

平成19年に完成したペデストリアン
デッキから見た現在の上永谷駅

丸山の山頂から望む開発前の丸山地区と貞昌院の裏山・天神山
（昭和46年、現在のイトーヨーカドーの屋上駐車場あたりから撮影：亀野さん提供）

造成工事終了後の丸山台方面（昭和54年11月に貞昌院裏山から撮影：亀野さん提供）

港南台駅

お話を聞かせてくれたのは、
根本健一さん、寺田宏子さん、髙橋ツタさんの3人です。

同じ記憶をたどりながら、お互いの話で新たな発見も ▶
（左から寺田さん、髙橋さん、根本さん）

子どもの頃は、日野峰の自宅から日野小学校まで、毎日片道4キロ歩いたという根本さん。その道のりは、水田の脇の砂利道でした。屋根のふき替えや道路の普請などを「結い」（互いに力を貸し合う習慣）によって行う集落があり、「良いあんばいですね」「ご精が出ますね」などの挨拶が交わされていました。昭和40年代に開発が始まり、根本さんは、風景を残しておこうと、もともと好きだったカメラで多くの写真を撮影してきました。

かやぶき屋根の集落があった開発前。冠婚葬祭も「結い仕事」でした

昭和40年前後
（円海山へ続く長野の丘からの眺め）

宅地造成が完了する頃
（港南台五～七丁目となる一帯）

開発で風景は
大きく
変わりました

造成中の写真を見ながら、「この頃は、雨が降ると泥んこでした」と寺田さん。初めてこの地を訪れたのは結婚前の昭和46年、当時は崖の下にあった、夫の先祖の墓参りをした時でした。地域に散在していた墓は、後に四ッ切（しっきり）（港南台二丁目）に集められました。48年4月9日、国鉄根岸線開通に伴い、港南台駅が開業。その10年余り後に転居してきた時には、港南台高校（現在横浜明朋高校がある場所）と山手学院の間の一帯には新しい家々が立ち並んでいました。

港南台駅開業の翌年、入居が始まっためじろ団地に越してきたのが髙橋さんです。当時は、駅のほかは「寺田酒店」と横浜銀行があるくらいで「駅と団地が近く感じた」といいます。「港南台バーズ」前身の「港南台マート」が団地の近くにオープンしたので、必要な物はそこで買いそろえていました。港南台第一小学校もできたばかり。児童はたくさんいましたが学童保育はまだなく、保護者が模索しながら、子どもたちを見てもらえる場所をつくっていきました。

現在のめじろ団地周辺

開業当時の港南台駅と現在の港南台駅

寺田さんと髙橋さんは、退職後に民生委員・児童委員などのつながりから、仲間を誘って歴史を学ぶグループを発足。近くの榎戸遺跡から出土した土器を港南台地区センターまつりで展示するなどして、歴史への関心を深めてきました。そして、写真を通してまちの移り変わりを記録してきた根本さん。港南区制50周年について、皆さんは「50年、早いですね」。「ぜひ歴史を語り継いで、これからの暮らしに生かしていってほしい」と話してくれました。

◀ 写真を見ながら昔を懐かしむ佐藤さん

港南中央駅

あゆみ幼稚園、南台小学校、港南中学校、南高校と、
ずっと駅周辺の学校に通っていたという佐藤益弘さんに、
当時を振り返ってもらいました。

港南区が誕生したのは小学4年生の時。周辺にはまだ田んぼや畑があって、友達とホタルやオタマジャクシ、亀や青大将まで捕まえて遊ぶのが日課でした。自宅のすぐ近くに京急上大岡自動車学校ができると水銀灯に集まった山ほどのカブトムシを分けてもらい、虫かごに入り切らず、鳥かごで飼っていました。

港南中学への入学は昭和47年。この時の入学式は、4月の開校時に校舎が完成していなかったため港南中学に間借りしていた、笹下中学の生徒と一緒でした。笹下中学が移った後も、校舎の増築があったりして、しばらくの間は校庭の半分ほどがプレハブ校舎でした。

中学時代はボウリングの全盛期。その頃、吉原バス停近くにボウリング場があり、1ゲーム100円程度でできました。いつも満員で2時間待ちも普通でした。

当時は
周囲を圧倒する
高さでした

港南区総合庁舎の落成は港南区誕生から2年後の昭和46年。

桜の名所として有名な桜道では
昭和49年から「港南桜まつり」が開催されています
（左が昭和56年、右が平成19年）
※現在は桜の高齢化のため「陽光（ヨウコウ）」という品種に植え替えを行っています

中学・高校を通して続けていたのは、区役所が主催していた「ジュニアリーダースクラブ」です。毎年、道志村や群馬県の「赤城林間学園」へキャンプに行っていました。キャンプファイヤーでは、薪の割り方や組み方、火の付け方、ゲームや歌のリードの仕方など、たくさんのことを先輩から教わり、また後輩へと教えていく、という伝統がありました。赤城のキャンプファイヤーの時に見た星空の美しさは今でも心に残っています。

港南中央駅が開業した時は高校生になっていましたが、通学は相変わらず徒歩でした。だから、駅の思い出は、電車が止まると学校を休める友達がうらやましかったことです。

昭和46年に生徒数2,184人、51クラスと最大規模になった港南中学校。
この翌年に笹下中学校が開校します（港南中学校提供）

左：昭和51年9月、開業当時の港南中央駅（交通局提供）
右：現在の港南中央駅。平成6年に設置された改札口と地上を結ぶエスカレーターは市営地下鉄初でした

佐藤さんは平成30年3月にいったん退職され、10か月ほどのブランクを経て、市内の小学校教諭に復帰されています。「昔は固定電話でさえ、子どもが使えるものではありませんでした。変わりましたね」と、話してくれました。

下永谷駅

生まれも育ちも下永谷という飯島勝さんと飯島武治さん、
3歳の時から下永谷に住む土屋清敬さんにお話を聞きました。

町内会の活動や地元の歴史を語り継ぐ活動などで顔が広く、新しい住民からも挨拶されることが多いという皆さん
（左から土屋さん、飯島勝さん、飯島武治さん）

この地域では長い間、人々の移動は徒歩が中心で、バスを利用するのも一苦労でした。「子どもの頃、買い物といえば平戸のバス停まで山道を40分ぐらい歩き、バスに乗って戸塚へ。藤沢まで行く人もいました」と飯島勝さん。飯島武治さんは「高校時代は、雨が降ると道がぐちゃぐちゃ。中永谷バス停まで歩くと革靴が泥まみれで、上大岡駅に着いた時に恥ずかしかった思い出があります」。バスが坂を上れず、降りるよう言われたこともあるといいます。

「永谷は、名前のとおり『ながい谷』なんですよ」と土屋さん。道路は丘に挟まれ、両側の谷戸に人家が4、5軒ずつあるほかは、田畑が続くばかりでした。人のいない谷戸と谷戸の間の電線を切って持ち去ってしまう「電線泥棒」のために、朝起きたら電気がつかなかった、というのも共通の記憶です。

工事中の下永谷駅

多くの住宅が建っているのが分かります

昭和50年代

昭和30年代の下永谷周辺。谷間には水田の記号（ıı）が広がっています
【横浜市地形図複製承認番号 令2建都計第9002号】

小学校は、3人とも永野小学校。野庭や芹が谷、山谷交差点（戸塚区）方面からも歩きやバスで児童が通い、雪の日などは10時や11時になってやっと学校にたどり着く子どもたちもいました。昭和40年代に開発が進み、住宅が次々とできました。後に開校した永谷小学校の10周年記念副読本は、永野小学校の児童の増加について「中永谷バス停を利用する児童だけでも160数名となり、一時に集まるので、通勤時間ともかさなって、とてもこんざつしました」と書いています。

地下鉄下永谷駅が開業したのは昭和60年（1985年）3月14日。皆さん「駅ができて、生活は一変しました」と言います。「今は上大岡、戸塚に湘南台、どこへ出るのも便利。それに静かで、場所としては一番じゃないかな」。

開業当時の駅出口

上大岡駅

港南区の玄関口にあたり横浜の副都心でもある上大岡駅。
駅から5分ほどの久保橋近くに住むご近所同士の
渡辺渥美さんと長谷川敏雄さんにお話を聞きました。

◀ 昔のことを語り始めると話題は尽きません
（左から長谷川さん、渡辺さん）

渡辺さんが越してきたのは昭和30年、歯科大学の学生でした。中区で営んでいた歯科医院が空襲で焼失し、父の代にこの地で開業した時、港南区域の歯科医院は4軒だけでした。東京の大学には京浜急行で通っていましたが、駅周辺は田畑が広がり、ホームからは美しい富士山が見えました。

小学生になったばかりの長谷川さんが、渡辺さんの2軒隣に越してきたのは翌年の31年。この頃の一番の楽しみは、9の付く日に商店街で開かれていた縁日で射的や金魚すくいをすることでした。

二人が越してきた30年前後は、駅前を通る鎌倉街道は全面開通しておらず、バス通りは大岡川沿いの狭い旧道を走っていて、バス停も久保橋近くにありました。当時の最大の生活課題は水害。駅周辺の宅地開発により切り崩された山林から、川に水が流れ込むようになったのです。「大雨や台風が近づくと親戚まで駆り出して畳を上げるのが恒例でした」と渡辺さん。長谷川さんも「ドラム缶がプカプカと流れてきたのには、驚きました」と言います。56年に大岡川分水路が完成し、やっと洪水の心配をしないで生活できるようになりました。

30年代半ばから上大岡は商業地域として発展し、38年には駅ビルが完成。次々と大型店舗ができ、47年12月には、市営地下鉄も開業します。その後、狭い商店街や雑然とした街並みを改良するため、平成4年に再開発事業が開始され、9年に京急百貨店、バスターミナル、オフィスタワーなどの複合施設が完成しました。今や横浜南部地域の拠点にまで成長した上大岡に「信じられないような変貌ぶりだね」と、二人は口をそろえます。

開業（昭和5年4月1日）間もない頃の湘南電鉄（現京急）上大岡駅。（桜岡小学校蔵）

当初は利用者が数十人ほどの寂しい駅でした

駅ビルへの建替えのために仮駅舎を使っていた昭和37年の正月風景。商店街（現パサージュ上大岡）の名前は大久保にあった花街の通称名「浜の箱根」にちなんで「箱根通」と名付けられました（渡辺さん提供）

昭和38年に完成した駅ビル。
1階に改札口、上階には上大岡初の大型商業施設として京浜百貨店が開業
（渡辺さん提供）

被害が最大となった昭和36年6月28日の洪水。
この夜大岡川が氾濫し、周辺は一面水浸しに（渡辺さん提供）

昭和45年の駅前通り（桜岡小学校蔵）

現在の駅前通り

鉄道写真の撮影が趣味という渡辺さんが長年撮りためた写真は貴重なものばかり。そして、現役時代は航空写真から地図を作る仕事に就き、歴史を学ぶグループにも参加している長谷川さん。長谷川さんが資料を集める中で渡辺さんの写真と出会い、交流が続いています。